

アフリカの人々と名付け 2

夫の父を産む妻——

生きた「墓石」としての子供、「墓碑銘」としての名前

小馬 徹

無文字社会と人の名前

梶茂樹は、ザイール東部のバントゥ語系農耕民であるテンボ人の社会では、命名法には無文字社会ならではの特徴があると言う『アフリカをフィールドワークする』(1993)。

梶は、「涙、喪、葬式」の意味を持つ普通名詞でもあるマリラという名前を例に取る。この名は服喪中に生まれた子供に与えられるが、「日本などでは人が死ぬと『どこそこの何兵衛、何々により死去、享年何歳』と文字で書くところだが、彼らは文字がない。そこで、人の死という重要な出来事を、子供の名前の中に刻んでおくわけだ」と言う。

とはいえ、赤ん坊が生まれた時に起こった出来事に因んで命名する慣行は、無文字社会に限ったことではない。ある日本の雑誌の読者アンケート「わが子の名前とその由来」には、粉雪の舞う寒い日に生まれたので、「小雪」、召集解除を記念する「召子(よりこ)」などの命名の例が散見される。

ただし、物事を記録し記念する媒体としての人名の重要さが、文字の不在によって高まることはあり得るに違いない。

ホトケとカミとを分ける文字記録

テンボのマリラの例を参照すれば、日本の民族におけるホトケとカミの概念の違いが、このことを上手く説明してくれよう。

日本では、位牌が死者の名を記念し、その死の事実を記録する。死後五十年ないし百年の間は、少なくとも祥月命日と年忌法要の時には死者の名が唱えられ冥福が祈られる。この間故人は、たとえ肉体は滅びていようと、折々家族の記憶の中に蘇っては様々な影響を与え続けている。いわば故人は、まだ「生きて」家族の中にあり、その大切な一員なのである。これが、民族におけるホトケとしての死者のあり方である。

だが、五十年忌ないしは百年忌が明けると位牌は燃やされるか、あるいは大分県速見郡のように屋敷林の根元(家根・やね)に埋められる。そして、故人の墓石は倒された。こうして、故人は集合的な祖先に合体して、屋敷神となる。今や彼の名前が子孫の家族の間で口にされることも、故人としての冥福が祈られることもない。

即ち民族的なカミとは、名前と個性を失った類としての祖先なのである。

このように日本の民俗を分析する時、墓碑銘や位牌に記された故人の死の記録、即ち文字記録の有無が、祖先の家族における地位をホトケとカミに分けることに気付くはずだ。ホトケとカミの差は、文字化された個人の記録が保証する記憶の有無がもたらす。

キプシギスの祖霊名と夫を産む妻

大きな家族に存在の基盤をおき、魂が子孫に再来することを信じているアフリカの人々にとって、何処でも最も恐ろしいのは子供を生まずに死ぬことだ。

西南ケニアの高原地帯に住む南ナイル語（カレンジン語）系の農牧民であるキプシギス人は、それを「永遠に死ぬ」と表現する。「永遠に死ぬ」ことは周囲の人々にとっても恐るべき結果を招く。再来してその魂と化すべき直接の子孫を持たない死霊は、行き場を失って彷徨いながら人々に災いをもたらす何より恐ろしい悪霊になるからである。

キプシギスの女たちは、赤ん坊が生まれると同性の祖先の名前を次々に唱える。そして、赤ん坊が最初にクシャミをした時に名前を呼ばれていた祖先が、その子に再来して魂になったと考えるのである。つまり、赤ん坊のクシャミは祖霊の応答だと考えられているのだ。この時に与えられる名は祖霊名と言い、最初の名であり、幼名の一つになる。

赤ん坊に再来すると期待されるのは、最も近い同性の祖先の霊である。一般には、直接の祖父または彼の兄弟であり、祖母または彼女の姉妹であることが多い。

しかし、若死にした父親の霊はすぐにも息子の体に立ち返って来る。残された妻は夫の氏族の男性が「相続」するのが伝統である。しかし、彼の妻の産んだ子供は、法的には全て彼の子なのだ。こうして彼女は、一日も早く夫を息子として産むことを夫の家族から期待されるのである。

墓石としての子供、墓碑銘としての名前

さて、「永遠の死」の概念があるにもかかわらず、子供を残さずに死んだ者の名が子孫の赤ん坊の祖霊名になることも珍しくない。

人々は、このように計らうことで悪霊と和解しようとするからだ。

人々は、与えられた祖霊名で、あるいは親族名称で「おじさん」「おばさん」とその子に日常的に呼びかける。悪霊は、その声を聞いて家族の中に自分が生きていることを感じとり、無念の思いを鎮め和らげるのである。

この事態は、一般の祖先の霊にもあてはまられると思われる。子の無い悪霊に限らず、子孫に存在を忘れられた祖先の霊は子孫に思い出して欲しい一心から祟りをなす、とキプシギスの人々は言う。

すると、「再生」の観念は実態ではないかも知れない。一部の人々は言う。あれは、名前だけのことなのだ、と。つまり、子孫に祖先の名前を与え、日常的にその名や親族名称を口にすることは、人々が決して彼らの存在を忘れていないことを示して、彼らを慰撫しているのだということになるだろう。

ここで、先に紹介した梶の考察が生きて来る。文字を持たなかったキプシギス人の間には、墓碑銘は存在しない——いや、元々牧畜民であったキプシギス人は、テソ人やトゥルカナ人と同様、墓さえも作らなかったのだ。だから、「人の死という重要な出来事を、子供の名前の中に刻んでおく」のだ、と。

更に、キプシギスでは、祖霊は子孫に再来してその魂となると信じられている。すると、子孫の子供の体こそが「墓石」であり、その子の名前が「墓碑銘」であるだろう。

我々は、無文字のアフリカ社会の命名の伝統に、生きる者と死せる者の永遠の弁証法を見た。「メメント・モリ」（死を思え）、ふとヨーロッパの古い格言の響きが蘇る。アフリカでは、死は人々の身近にある。

（こんま とおる 神奈川大学 社会人類学）